

検査と技術

臨床検査技師の「知りたい！」にこたえる

2

Vol. 47 No. 2
FEBRUARY, 2019

★ 今月のピックアップ

コンパニオン診断としての肺癌遺伝子検査

技術講座

シリーズ 臨床に伝わる画像記録とレポート作成の工夫・1

腹部エコー

セルロースアセテート膜電気泳動を用いた蛋白尿の解析

造血器腫瘍におけるフローサイトメトリー検査

病気のはなし レジオネラ症

トピックス *Dysgonomonas capnocytophagooides* の細菌学的特徴

フォーカス 社会に出て活躍できる医療人の育成

フォーカス 見直そう睡眠検査と睡眠医学

生理検査のアーチファクト MRI 検査② 化学シフトアーチファクト

社会に出て活躍できる医療人の育成

昭和医療技術専門学校臨床検査技師科

かとりなおみ
香取尚美

はじめに

まず今回の前提として、私の立場では、私たちの学校で行っていることを軸に述べさせていただくが、これはあくまでも臨床検査技師教育全般を担っているものではないということ、そして見解は、個人ではなく学校としての考へであるということをお断りさせていただく。そういう上で、依頼をいただいた今後の臨床検査を担う若手育成について考えてみたいと思う。

現在の臨床検査技師教育の現場では、4年制教育・3年制教育、また承認校・指定校と形態はさまざまであり、資格取得という面では薬学部、獣医学部などの教育課程からでも国家試験は受験できる。そう考えると、何をもって臨床検査技師は臨床検査技師であるのだろうか？本校は臨床検査技師教育に特化した専門学校であるが、ベースとなる考え方として、“臨床検査技師は医療人である”という観点から、医療人教育を行っている。専門性に特化した教育内容はもちろんのこと、現場に立ち続ける力と患者に寄り添える感性、そのうえで多様性を身につけることを大切にしている。そして、卒業後は、自らの力で成長する現場力をもった、そんな基盤のある医療人を輩出するために本校で行っているカリキュラムについて、その意味合

いも含めて、いくつかご紹介したい。

臨地実習

昨今、臨床検査技師養成校における臨地実習期間は短縮傾向にあり、学生の負荷となるべく減らすような方針をとる学校が多いなか、本校では、全国で最長の6ヶ月間の臨地実習を行っている。臨床検査技師は、臨床という医療現場において、検査を担う医療人のことである。人との距離感、関係性、空気感、このようなことは臨地実習という実際の現場に身を置くことでしか学ぶことができないと考えている。そこで経験は、技術はもちろん、体力、精神力までも成長させ、自立した医療人としての第一歩を踏み出すことができる。しかし、本来実際の医療の現場に立つには、その場に行くにあたっても担保されるものが必要である。現在の臨床検査技師教育のなかではその定めはないが、本校では、臨地実習前後でオリジナルの客観的臨床能力試験(objective structured clinical examination: OSCE)を行い、接遇研修なども複数回行っている。

日本語表現法・思考法

病棟、在宅を含め、これから臨床検査技師は自ら出向き、人とかかわる力が必要とされ

る。これは日本臨床衛生検査技師会(以下、日臨技)の打ち出している方針を見てもわかるように、現場で必要とされる医療人として当然の流れである。本校では、以前より外部機関と連携し、コミュニケーションワークを中心とした講座を入学直後から継続的に3年間行っている。1年次に行っている日本語表現法という講座では、傾聴、自己表現などをさまざまなツールやワークを通して身につけていく。2年次になると、日本語思考法という講座につながり、その思考を深め、文章として表現できるような力を高める。そのような力は3年次の臨地実習においてだけではなく、先の就職後のコミュニケーション、リーダーシップへもつながっていく。

医療人特論

医療人特論という講座では、臨床検査技師以外にも他業種にわたってスペシャリストをお呼びし、講演および対話の時間を設けている。臨床検査技師としては、日臨技会長、東京都臨床検査技師会(都臨技)会長などをお呼びするが、他に来る方々は、登山家、合氣道家、スポーツ日本代表選手、新聞記者、日本だじゅれ活用協会会長など、それぞれの業界で活躍されている方々である。しかし、そこにはある共通点が存在する。それはその方々が“本物”であるということである。若いころから本物に接する機会を増やし、その人が醸し出すものに触れ、対話を交わすことで、学生の感性は大きく飛躍する。

あいさつ、掃除、礼儀

本校では、あいさつや掃除、礼儀を重んじている。あいさつを相手の承認の意味と考え、前向きに交わすことにより、相手との関係性、コミュニケーションを図ることができる人材にな

れる。また、学生は早朝より、校内および校外の清掃を行っている。こうしたあいさつや掃除は、地域とのつながりなども増し、社会的に必要なこととも考えるが、その根本にあるのは学生の自立である。社会に出てから、そこで必要とされる、目がキラキラとした医療人となるべく、私たちは教育を行っている。そして自立するために、最も大事なのは“自律”という観點である。あいさつや掃除、礼儀は、言われてやるものではなく、やって当たり前のことという認識で、自らの意志で行うものであり、人の命にかかり、支える医療人として当然の自律行動として誰しもが身につけておくべきであると考え、大事にしている。

他にも、1年次のディズニー研修や、生命の倫理などの対話型講義、2年次の台湾研修旅行や、3年次の臨地実習後の富士山キャンプなど、特徴的な取り組み・カリキュラムは紹介しきれないが、誌面には制限があるので、興味のある方は本校に直接お問い合わせいただければと思う。

おわりに

最後に冒頭に戻るが、現場に立ち続ける力と、感性を鍛えることが、医療人のベースとして大事にしていることと述べた。これは、まさに、これからの医療人としての臨床検査技師が、多様性をもつてのベースとなる、最も必要なことであり、そして、昨今あまり大事にされていないことであると感じている。

医療人として一番大事なことを“人の心に寄り添うこと”と本校では掲げているが、その場にしっかりと自立して存在しなければ、どんなに優秀でも患者の役に立つことはできない。だから本校では、全講義、1分1秒たりとも無駄

な時間はないと説き、卒業式では半分以上の学生が皆勤賞(無欠席、無遅刻、無早退)で壇上に並ぶ。

また、前述のキャンプなどのイベントやカリキュラムも、その感性を育むのに大いに役立っている。全員参加での体験とそこで感じたこと・気づきが体感となり、医療の現場でも必要とされる感性につながっていく。

その効果は、国家試験に直結するものでも、その場ですぐに使える役立つものでもないかもしれない。そのため、こうした取り組みを行っている養成施設は少ないようだ。しかし数年後、数十年後に意味があることであれば、それは教育として必要なことであると考え、本校では丁寧に行っている。

知識、技術に関しても同様で、多くのチャレンジの機会を設けている。本年度からは遺伝子分析科学認定士試験を3年生が全員受験し、そ

の合格率も全国平均に近く、勉強に取り組む姿勢も含めて、多くの成果を上げた。また、現在、卒業生に対しても卒業生セミナーを開催したり、社会人向け教育を本校で行ったりしている。そのときそのときに必要とされるような教育を、生涯を通した相互関係のなかで行っていくことも、学校の役割であるのかもしれない。

まだまだ至らないことが多い、表現も十分ではないが、本校での取り組みの一端を紹介した。社会に出てからも、人は読書や旅、人の出会いを通してそのような力(医学領域のみならず、人としての強さや感性)を身につけることはできる。本校教育はあくまでも参考であり、そのなかで気づいたヒントからおのおのが実践していただきたい。また言葉足らずななかで、不明点や質問などあれば、いつでもご連絡いただければと思う。

MEDICAL BOOK INFORMATION

イラストでまなぶ生理学 第3版

田中越郎

●B5 著240 2016年
定価:本体2,600円+税
ISBN978-4-260-02834-9]

医学書院

看護学生・看護職のみならず、医学生・コメディカルにも評判の高い生理学の入門書。「イラストでまなぶ」シリーズの1冊で、第3版ではイラストの刷新・カラー化によりさらに使いやすくなった。また、本文は重要度を3段階で示し、キーワードを色文字にして強調したことで学習の助けとなる。生理学の基本的事項を網羅的かつわかりやすく解説した、必携の1冊!